

書面、病人一人ニ付、錢二百文ヅ、助力として差遣度由、○中御聞濟被成候段、養生所見廻、江被仰渡候而可然哉ニ奉存候、

巳十月

松浦作十郎

加藤又左衛門

〔嘉永撰要類集養生所二十三〕天保十四卯年三月八日、阿部遠江守を頼、向山源大夫を以、水野越前守殿江上ル、同十五日、御書取添、荒井甚之丞を以御下、繕付致、翌十六日返上、ヒレ付末ニ有之

〔越前守殿

小石川養生所附御醫師御引替之儀ニ付、取調候趣申上候書付、

〔鳥居甲斐守

町奉行

小石川養生所附之儀、向後御醫師より出役は御差止、右明跡は、町醫師之内、療治宜仕候者を、早々吟味いたし可相伺、就而は、御定人數、御手當藥種料之儀も、厚勘辨仕可申上旨被仰渡候ニ付、取調左に申上候、

此段、養生所御醫師、本道本勤貳人、外科同貳人、眼科同壹人、都合五人、本勤定人數ニ有之、藥種料之義、享保十八丑年より、御役料ニ相成、本道壹人百俵、外科眼科同六拾俵宛被下置、同所見習之御醫師は、五人限に被仰付、右は御役料無之、自力を以療治引受候得共、是迄は寄合又は小普請御醫師より相勤、右出役中は、勤仕並に相成、小普請金御免、月並御禮ニ罷出候ニ付、御役料ニ不拘、多分之藥劑差出、相勤來候處、此度は、御宛行無之もの江被仰付候儀ニ付、右例は難引當候間、舊記をも取調候處、享保十八丑年養生所肝煎小川笙船倅同苗丹治儀、藥壹帖ニ付、銀貳分ヅツ之藥種料被下候處、一ヶ年金百兩餘ニも相成、御入用相嵩候ニ付、貼數ニ不拘、年々金五拾兩